縄文土器文様の物語性

小野　正文（甲州市教育委員会）

縄文土器の物語性文様とは、ある特定の概念が土器に文様として表現されたものである。ここでは、その概念が具象的に表れたヘビについて分析を進める。実は物語性文様については、先駆的研究が多数あり、筆者はほとんど周回遅れ以上であると自覚しつつ、文様を特定する手段を明らかにしなければ、学としては成立しないと考えている。そこで、今回は原点にかえり、最も基本的な方法を提示して、ご批判を仰ぎ研究進展の一助としたい。

1　研究略史

土器に施された文様が何か意味のあるものであるという研究は、八幡一郎（1957）の「縄文土器の人物意匠」がその始めではないかと思われる。重要な指摘を６項目にまとめている。

ついで武藤雄六（1964）は「勝坂式土器に表現された人体装飾」と題して藤内遺跡の有孔鍔付土器を紹介している。ここで、注目されるのは、人体装飾と見なしながら、“蛙の背状の胴部”と反対側の大円を“太陽”と見なしている。

同じ年に江上波夫（1964）は「勝坂式系土器の動物意匠について」と題して、中国及び西アジアの土器をも紹介した。「その意匠は、単独に、他と無関係に創造されたというより、勝坂式系土器を特徴づけた彫塑的、直・曲線的な装飾意匠によって暗示され、触発されたと見得る場合が多い。」とし、また、その擔手の生活環境のかなり直接的な反映と認められるので、そこから彼らが原初的な農耕の段階にあったことも自ら推測されてくるだろうと重要な発言をしている。この江上の見解は、とても重要な指摘である。これは後にふれる小林達雄の「物語性文様」の概念と反する。

宮坂英弐（1956）は『古代の村』の中で、勝坂式土器の口縁部に、蛇の把手を具体的に「マムシ」と指摘するに至った。

野口義麿は動物意匠についても造形が深く、藤内遺跡の土偶の頭部は蛇であることを指摘したのも野口である。「蛇身装飾の分布と背景」（野口 1974）の中で、蛇身装飾は中期の初頭に出現するが、加曾利Ｅ式土器の時期にはもう出現しないと指摘し、原始農耕生活を摂取した事実は認められないと結論している。

武藤雄六 (1978) は報告書『曽利』のなかで土器の部位と施文される文様との相関関係を指摘して、曽利３２号出土の区劃文深鉢の文様解読を試みている。７６号住居址出土の抽象文装飾甕の文様解読を行い、水田風景のなかの蛙を追う鰐という解釈であり、源流は中国南部から印度東部としている。

武藤の影響の下に『山麓考古』には幾つかの論考が発表されているが、小林公明の「月神話の発掘」（1984）「双眼を戴く土器」（2001）が特記される。田中基はやや趣をことにしながらも「メデユーサ形ランプ」（1982）という非常に魅力的なタイトルのもとに文様解読を行っている。その他、「山麓考古」には魅力ある論考をいくつか発表されている。こうした論考は彼らと親しいネリー・ナウマンの論考とも繋がる。

渡辺誠（1988 ほか）は、人面、土偶、足形装飾土器について、精力的な集成研究を進めるなかで、文様解釈についても積極的に発言している。また、比較神話学の立場から、吉田敦彦（1976）は多くの著作を発表している。

ところで、縄文土器の文様解読とは別に、縄文土器文様分析の研究がある。これについては小杉康（2006）がよく整理している。小林達雄（1986）は縄文土器の文様を、装飾性文様と物語性文様と分け、さらに装飾性文様はＡとＢに分ける。「物語性文様の確立は、いわばカタチに先行して存在する特定の意味＝概念があって、それが特定のカタチに具現されるという、それまでになかった新しい因果関係をとるものであった。」と説明する。さらに氏は、物語性文様の理解については刀の目貫のデザインを河童駒引き図と理解するのもワシントンがデラウェア川を渡る油絵をワシントン凱旋図と理解するのもその文化の具体的実態を知らない者にとってはまったく理解

しがたいものであるいう。

江上の「彫塑的、直・曲線的な装飾意匠によって暗示され、触発された」文様という考えと小林の「いわばカタチに先行して存在する特定の意味＝概念」の文様とはまったく違う考え方である。筆者は縄文土器文様には、この二つの概念が併存しているのではないかと考えている。2010 年に「物語性文様２」において、抽象文土器を取り上げで、その面貌や乳房を持つ抽象文もあるなどの多様性を指摘した。この抽象文土器のあり方は、江上の概念に近いのではないかと想像される。

2　分析方法

物語性文様を理解するには、個々の単語ともいうべき文様を特定してゆく必要があり、ここの単語辞典を作り、熟語や構文ひいては、文法（規則）明らかにしてゆく必要があると考える。具体的には次の段階があると思う。

レベル１　文様が具体的で、誰がみても具体的名称を指摘できる段階。

レベル２　やや抽象化が進んでいるが、変遷過程を証明できる段階。

レベル３　それ自体では何を表現しているか不明であるが、文様構造から理解される段階。

例えば、山梨県安道寺遺跡のイノシシ装飾付土器のイノシシは、レベル１で、異論を唱える人は少ないと思われる。また、同じ遺跡の有孔鍔付土器もヘビ文様で異論はないものと思われる。

埼玉県羽沢遺跡の愛称「ムササビ形土器」または「ムササビ土器」は、縄文中期の土器を代表するような造形的に優れた作品であり、各地の展覧会によく出品され、書籍にもよく掲載されており、我々にはなじみの深い土器である。

屈折底で大きく張り出した口辺部、双環装飾の上にまるで帆を張ったような粘土板を載せ、口唇部の反対側にはイノシシ装飾があり、これと対峙する構図である。愛称の経緯は不明だが、名称から縄文人がムササビを表現したかのような印象を抱かせる。

ムササビは夜行性で、木から木に飛行する動物で雑食性である。体重が１キロ程度であり、数 10 キロに達するイノシシやシカに比べて、食糧資源としては格段に低いと言える。古墳時代の埴輪にも見えるが、特段信仰の対象となったような形跡はない。青森県三内丸山遺跡では出土動物骨の 39％を占めるが、一般的な縄文時代の遺跡では 2％位である。

ムササビ形土器という愛称もムササビであるという論理的整合性をもった付け方ではないと思われる。『日本の美術』の「縄文土器ー中期」の編集をした土肥孝（2007）は「前面に抽象化された獣面、後方に眼鏡状文を配した大把手が付され、正面をずらせてやや上方から眺めると、ムササビが飛翔する姿となる。（後略）」と言っている。

これは、現代人の見方を表現したもので、縄文人が何を表現しようとしたかではない。博物館の行事では何の動物かと言うアンケート調査することがあるが、アンケートは心理学の問題であって、考古学の方法ではない。

まず、筆者は縄文土器のなかで、最も人気の高い土器である人面装飾付土器とか顔面把手付土器と呼ばれる土器の面貌を模式図のように分析した。

ここで、１類 A の人面を除いて、ほとんどがシングルとダブルの関係になるのである。時には違う面貌が半分ずつ組み合わさることもある。

さらに、この面貌の分析から発展させて、「九兵衛尾根型文」と言うのを提唱している。それは、面貌から両腕が伸び、片方の手先が蛇頭になるものである。もっとも具象的な土器が長野県富士見町の九兵衛尾根遺跡で出土している。井戸尻考古館に展示され、筆者も長い間見てきたものであるが、長野県茅野市の梨ノ木遺跡の人面装飾付土器や藤森英二が精力的に分析してきた蛇体把手土器を見直すなかで、曽利式土器に移行する過程で重要な文様であることに気付いたので、面貌が人面、凸面、乳頭面、輪面であろうと、蛇頭が左ないし右であろうと一括して、時には蛇頭では左右とも手であっても、一括して九兵衛尾根型文と呼ぶことにしている。

この、九兵衛尾根型文はいわゆる多喜窪タイプの土器の屈折した口辺部には、しばしば付けられる。また、蛇

体把手土器の口辺部にもしばしば付けられる。

次に、山梨県山梨市高畑遺跡の展開図を示す。個々の文様もまた物語性文様であるので、解析が必要であるが、ここでは、九兵衛尾根型文のみ取り出したい。４本の垂下する隆帯の間に２つの九兵衛尾根型文が見られる。面貌は小さく乳頭面に近いが、凸面としておく。ここでは、左腕の先が蛇頭となっている。

またこの九兵衛尾根型文は、まるでピカソの絵画のように、部分部分を個々に施文することがある。最もよい例は埼玉県志木市西原大塚遺跡の人面装飾付土器である。円面と蛇頭の蛇と腕手が分離されて、４つの突起の間に施文される。

熟語を単語に戻して、施文している訳であるが、言語では意味が変化してしまうが、縄文土器文様ではそのことは不明であるが、我々に注意を喚起させる。

次に蛇体把手土器には、その屈折した口辺部に九兵衛尾根型文がしばしば施文され、その変化は、短い時間の中で激しい。まず、長野県郷土遺跡の例では、乳頭面に右手が３本指ではなく、V 字状になり、蛇頭は粘土紐の単なる屈折に変化している。山梨県一の沢遺跡の蛇体把手土器の九兵衛尾根型文が最も良い例であり、右腕は２本の隆帯で表され、外側の隆帯が途中で渦を巻く、これが、羽沢遺跡のムササビ型土器の双環装飾の上に船の帆のように張り出した中央に施文される隆帯と同一なのである。羽沢遺跡例は隆帯に刻み目などの装飾が施される。釈迦堂遺跡出土土器は羽沢遺跡とは違い、対峙するのがヘビであるが、双環装飾の上に張り出した帆のような突起に隆帯が１本になり、その上部を欠損しているのが惜しまれる。

以上、面貌の分析から、九兵衛尾根型文を抽出して、その変化を追う中で、羽沢遺跡の双環装飾付土器の双環の上に載るのはヘビであることが、レベル２で証明されたと思われる。

次に、レベル３の問題として証明されるのは、関東中部地方の縄文中期の土器を概観する中で、人面装飾、双環装飾の上に載るのは、ヘビとイノシシ以外にないと言うことである。基本的にはヘビが施文される。イノシシの例は極めて少なく塩野コレクションの東京都草花松山前遺跡の人面装飾付土器に見られ、双環装飾では山梨県上野原遺跡に見られる。

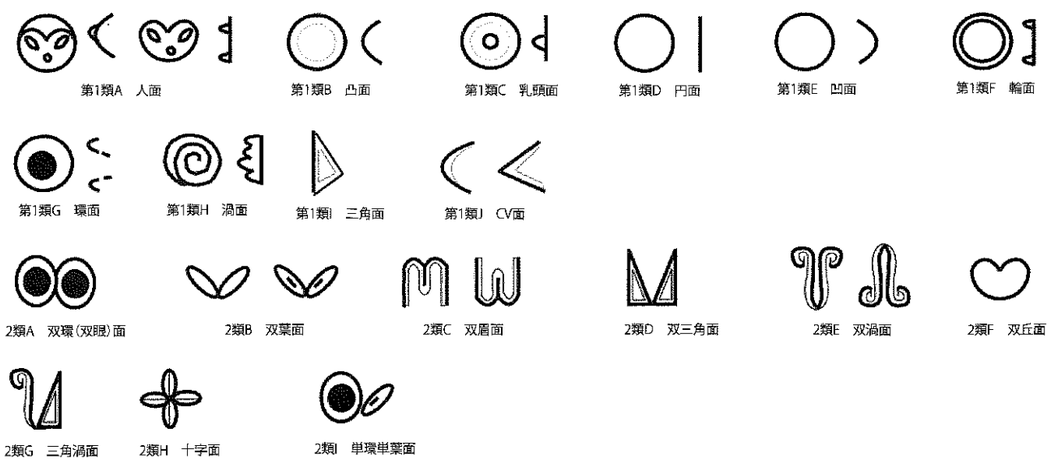
次に、羽沢遺跡例ではヘビを戴いた双環装飾が対峙するのはイノシシである。ここでは、イノシシであることの証明には、また多くの紙数を要するので省略するが、イノシシとヘビの対峙、ヘビとヘビの対峙、数は少ないがイノシシとイノシシの対峙がみられる。これからもレベル３で羽沢遺跡の双環装飾の頭上戴く文様はヘビと見なされるのである。

縄文土器文様に原則を見出そうと試みても、常に例外に遭遇するが、原則のようなものが存在するのであろうと思う。それは、物語性文様の意味と深いかかわりがあると思われる。有孔鍔付土器にはイノシシは表現されない。イノシシは基本的に口縁部より上に施文される。釣手土器には抽象文やカエルは表現されない。抽象文は、口辺部文様帯から懸垂されるのを原則として、独立する例は少なく、口縁部より突出することはない。カエルは口縁部より突出することはほぼないが、例外が存在する。

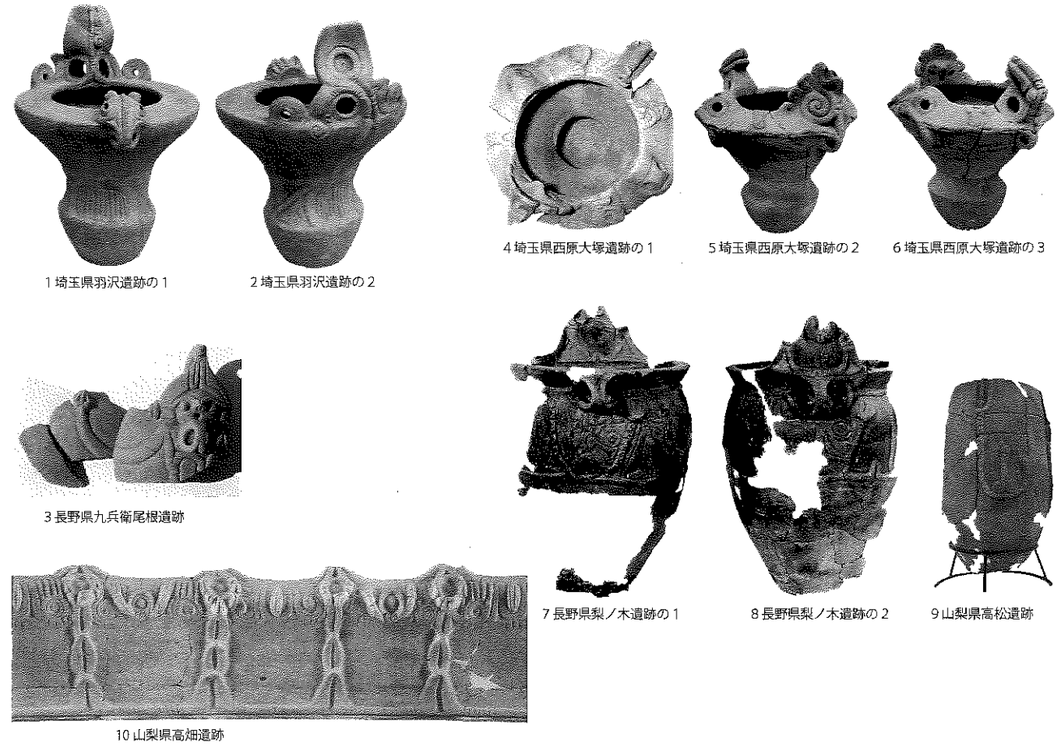
以上羽沢遺跡出土土器を例に取り、小さな歩みではあるが、双環装飾の上に戴く帆のような粘土板に目が行くが、そこにはヘビが隆帯で表現されていることを証明できたと思う。

参考文献

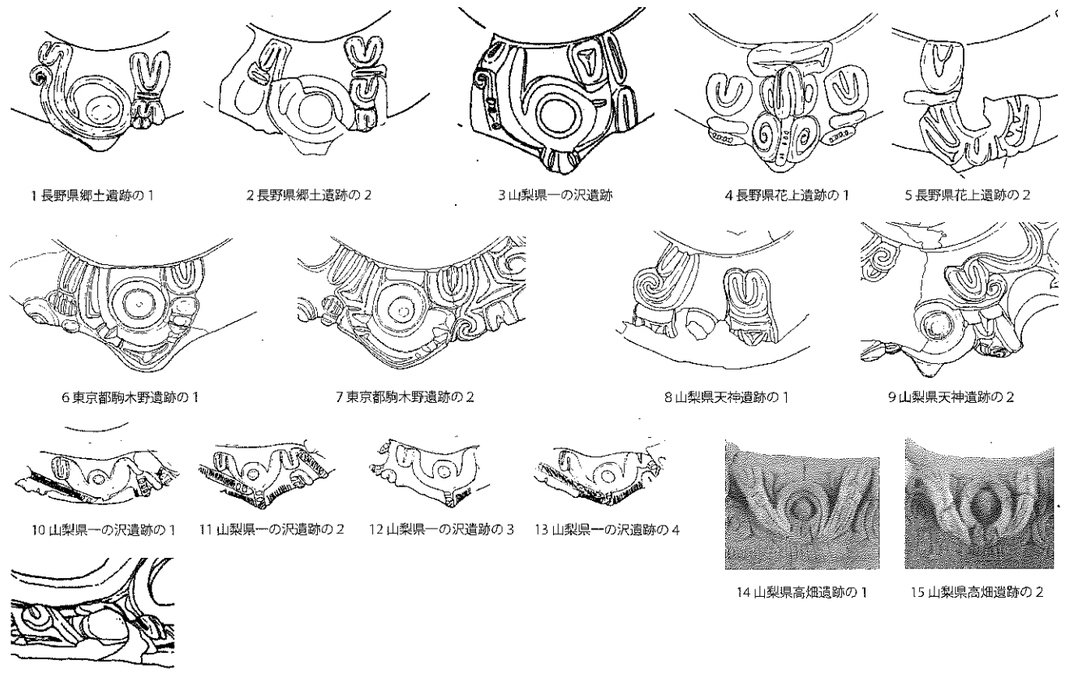
八幡一郎　1957　「縄文土器の人物意匠」『考古学雑誌』４１－４　241-251 頁
武藤雄六　1964　「勝坂式土器に表現された人體装飾」『考古学雑誌』４８－４
江上波夫　1964　「勝坂式系土器の動物意匠について」『国華』７２－６
宮坂英弐　1956　『古代の村』
野口義麿　1974　「蛇身装飾の分布と背景」『古代史発掘』３　講談社　125-129 頁
小林公明　1984　「月神話の発掘」『山麓考古』１６
小林公明　2001　「双眼を戴く土器」『山麓考古』１９
田中　基　1982　「メデューサ型ランプと世界変換」『山麓考古』１５
吉田敦彦　1976　『小さ子とハイウェレ』ほか一連の著作
吉田敦彦　1986　「火を宿す女神一釣手土器と神話」『週間朝日百科・日本の歴史』３６
渡辺　誠　1988　「人面・足形装飾付の香炉形土器」『史学』４４　15-29
渡辺　誠　1998　「人面装飾付注口土器と関連する土器群について」『七社宮』　230-257
吉本洋子・渡辺　誠　1994「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』１号　27-86
吉本洋子・渡辺　誠　1999「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』８号 51-86
渡辺　誠　2004　「人面・土偶装飾付有孔鍔付土器の研究」『研究紀要』２０　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
小杉　康　2006　「土器造形の発達とカテゴリー操作」『心と形の考古学』　101-132 頁
小林達雄　1986　「土器文様が語る縄文人の世界観」『日本の古代史　宇宙への祈り』102-134 頁
坪井清足　1971　「縄文文化論」『日本歴史』１
春成秀爾　1997　「精霊の絵」『原始絵画』歴史発掘５　55-71 頁　講談社
藤森英二　2006　「縄文時代中期中葉後半における、ある土器の系譜」『長野県考古学会誌』１１８118-136 頁
小野正文　2005　「蛇頭の腕をもつ人面装飾付土器について」　25-39 頁　『長沢宏昌氏退職記念考古学論攷集』
小野正文　1992　「イノヘビ一猪蛇装飾のある土器について―」『考古学ジャーナル』３４６
新津　健　2003　「上の平遺跡出土の動物装飾付土器とその周辺」『研究紀要』１９　64-74 頁　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
小野正文　2010　「物語性文様２」『研究紀要』２６　1-9 頁　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター



第1図　面貌模式図



第２図　ヘビ装飾１



第３図　ヘビ装飾２